

後藤新平の台湾

渡辺利夫（拓殖大学学事顧問）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十二月より現職。

このところ後藤新平についての一書を仕上げることにエネルギーを注いできた。コロナ自粛の「お陰」で執筆時間がふえ、原稿が予定よりはやめにできあがった。年が明ける頃に『後藤新平の台湾——人類もまた実に生物の一つなり』というタイトルで中央公論新社の選書の一つとして出版される。サブタイトルに後藤、畢生の著作『国家衛生原理』のキーワードを添えることができ、われながら悪くないと感じている。原文を紹介しておくところである。

「苟^{いやく}モ生^{せい}ヲ有スルモノハ、競争ノ攻撃ニ抗^{こう}抵^{てい}シ、若^{もし}クハ之^こヲ剋^{こく}制^{せい}シテ、適^あ当^{ちやう}ノ給^く養^{やう}生^{せい}殖^{じく}ヲ営^{えい}ミ得^えルニ非^{あら}ズンバ、其生存^{せいぞん}ヲ全^{ぜん}クスルコト能^{あた}ハズ。独^{ひとり}人類^{じんるい}ニ至^{いた}テ、何^{なに}ゾ然^{しか}ラザルノ理^りアラ^あランヤ。人類^{じんるい}モ亦^{また}実^{じつ}ニ生物^{せいぶつ}ノ一^{いっ}ナリ」

後藤が『国家衛生原理』を書いたのは明治二十二年、三十二歳の時であった。この時代は欧米の社会科学の勃興期であり、一世を風靡^ひしたものが社会進化論であった。後藤もその影響を強く受け、社会進化論を後藤流に読み解いた。生存競争を通じて適者生存にいたる人間の生の目的とは、「生理的円満」の充足に他ならないという。

人間が生理的円満を求めるのは、人間に「固有セル天性」だともいう。ここからが実にユニークな後藤の論理展開となる。この生理的円満は個々の人間の力によって獲得できるものではまったくなく、個々の人間の生存欲求を満たす公共的秩序が不可欠である。この「公共ノ力」こそが国家だという。後藤の国家起源説である。個々の人の私的利益の追求が自己運動を重ねて最適解にいたる、そういった「予定調和的」な世界観とはきわだって対照的な世界観が後藤のものであった。

台湾をいかに統治するか。台湾住民が生理的円満を得ようとどのような慣行（旧慣）の中で生きてきたのか、まずはこのことを徹底的に調査研究することから始めねばならない。政策の立案・施行は精細な調査研究があつて以降のことだ。満鉄調査部、東京市政調査会を創設するなど、後藤ほど調査研究に情熱を注いだ政治家も珍しい。